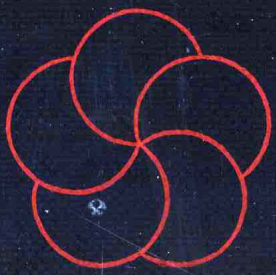
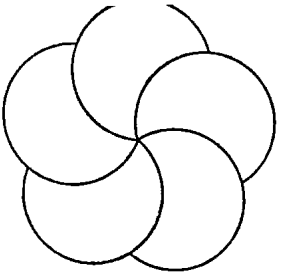
4

日本文学の歴史



復古と革新



4 復古と革新

日本文学の歴史

佐藤謙三　竹内理三 編

日本文学の歴史（全12巻）　第4巻 復古と革新

昭和42年8月20日　初版発行

定価650円

編者　佐藤謙三
　　竹内理三

発行者　角川源義

印刷所　中光印刷株式会社
製本所　株式会社 鈴木製本所
製版所　株式会社 高木写真製版所
発行所　株式会社 角川書店

東京都千代田区富士見2—13
振替東京195208番
電話東京（265）7111番

© Printed in Japan　落丁・乱丁本はお取り替えいたします

目次

欠けゆく望月　九

望月の歌　欠けそめる月　頼通一家の違算　村上源氏と結ぶ　望月の世の裏側　大江匡衡
刃傷事件　東国の兵乱　胎動する地方　血の報復　月西山に傾く

歴史物語の登場　三六

六国史の挫折　官撰国史につづくもの　歴史物語への道　かな日記の資料集め　『栄花物語』の登場　皇室をめぐる人々　初花のよろこび　浦々の別れ　史実と虚構　物語への傾斜
栄華の晩鐘　史書と物語との相克　『栄花物語』の功績と失敗　栄華の追憶　続編の性格と作者

装える文芸　六八

高陽院水閣歌合　道長から頼通へ　頼通サロンの周辺　歌合の盛行　君臣和楽の文芸　薄幸の斎院、禖子　六条斎院物語合　華麗なるサロン　四条宮春秋歌合　歌僧、能因　六人党の人々　歌道への執心　六人党のゆくえ

追憶の手記　九八

はかなき追憶の日記　ある女の一生　女ごころの記録　『成尋阿闍梨母集』　老母の嘆き
愛と死の記録　臨終の看病記　死をみつめて　愛の終わり

ほろびゆく時代のロマン　二八

物語の作者と享受者　『浜松中納言物語』　『源氏物語』への追随　夢と転生　かりの契りと
まことの契り　抑制された愛欲の世界　『夜半の寝覚』　『夜半の寝覚』梗概　主題の分裂
情痴の凝視　女のかなしみと宿命　『狭衣物語』の新趣向　かなわぬ恋の物語　緊密な筋だ
て　現実感に欠ける悲恋　世俗の栄達と愛の不毛

『大鏡』の世界　二四六

新しい意匠　三史と『大鏡』　口伝の集成　説経師の面影　狂言綺語の文学観　説経の場
の懺悔　摂関政治と女性の役割　ささきの家の物語　男の文学　世のさがなもの　アウト
サイダーの面影　新時代の倫理　この世の栄華

新しき時代への前奏　二七四

後三条の深慮　静かなる交代　天皇家の家庭事情　暴君の面影　院の近臣たち　夜の関
白・法師関白　受領の人々　長者と国司　大名田堵　武者のおこり　貴族の侍　平氏登
場

外国（げこく）に芽ぶくもの　一九八

東方にひびく潮騒　将門の乱の余燼　新しい人間像の誕生　頼信と馬盗びと　武士団の形成
つわものからさむらいへ　兵立ちたる者　才女とつわもの　驍勇絶倫、騎射神のごとし　八

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

幡太郎は恐ろしや　武士像の原型　『陸奥話記』の成立　国解の文と衆口の話　いくさがたりの流行

『今昔物語』への道　二二四

野盗袴垂のはなし　新しい英雄　主役の交替　肝太く力強き男　袴垂のモデルとその周辺
没落者の子孫の生き方　保昌と袴垂　受領陳忠と平茸　物欲への執念　たくましい生活力

王朝のヒューマンコメディー　二四六

転換期の群像　危機の文学　『藪の中』　大江山の惨劇　庶民の生のあわれ　変質するモラル　武士の残虐　人間社会への関心　仏道修行の物語　法師の理想像　増賀聖人の奇行
貴族仏教を弾劾する　世間話の文学　説話文学の流れ　事実をみつめる目　人間劇の宝庫

絵巻物と文学との出会い　二八〇

応天門の炎上　昔の紙芝居　中国の絵巻　歌絵・物語絵　殿上の絵合　絵巻の構図　絵巻の展開　語りと絵画　絵解き語り

和魂漢才　三〇四

漢文学の谷間　微官の巨匠、藤原明衡　本朝意識の芽ばえ　『本朝文粋』の多様性　明衡から匡房へ　実学的教養への認識　藤原敦光の詩才　編纂ものの流行　まぼろしの大漢詩集
唐風最後の光芒　パトロン兼作者、忠通　漂泊の詩人、蓮禅　遊戯化する漢詩文　庶民のための教育意識　大陸新文芸の投影　『新猿楽記』の世界　『遊女記』と『傀儡子記』　京都の田楽旋風　裾野をひろげる漢文学　漢文体の説話・唱導より和漢混交文へ

院政期の歌壇　三四〇
王朝和歌より中世和歌へ　むなしき殆　勅撰は聖代の指標　代表作のない撰者　女歌の集
勅撰和歌集へのあこがれ　デスポットと愛嬢　堀河院歌壇の人々　王朝美学の結晶　摂関家
に集まる歌びと　撰進三度『金葉集』誕生　田上の里　子を思う田鶴　苦労人顕輔　『詞
花集』撰進　約束ごとの世界　山林に入るこころ

物語のゆくえ　三七六
『とりかへばや物語』　むしばめるロマン　斜陽貴族の求めるもの　『有明の別れ』　『あ
さぢが露』　失われた物語　短篇小説の世界　王朝物語の終末

落日の幻想　三九二
末法いたる　天王寺道公の話　補陀洛渡海　補陀洛にあこがれる人々　落日のかなた、西方
の聖地　入日の民俗　二上山の幻想　迎講　現世の浄土　聖地巡礼　『参天台五台山記』
民衆の求める救い　聖、西念の遺書　極楽願往生歌　西海の落日

新芸能の展開　四二〇
月下の宴遊　殿上の淵酔　芸能の意義　新芸能の台頭　祇王と仏　遊君の歌舞　白拍子
のゆくえ　田楽の勃興　風流の誕生　官能のめざめ

庶民の歌ごえ　四三八

貴族から庶民へ　「幻の書」あらわる　今様とは　長うてくせづいたる歌　遊女と今様
仏は常にいませども　遊びをせんとや　今様歌のさまざま　『梁塵秘抄』の世界　庶民の歌
ごえ　風刺とユーモア　沙汰だしく遊ぶ帝王　今様修業、四十年　当意即妙の機知　しづのをだまき

うたう底辺の人々　四六八

散所の長者　散所の人々　遊女の条件　江口・神崎の繁盛　貴顕と遊女の出会い　傀儡子の記　即興歌曲の定着

参考文献　四七六

日本文学年表　四七八

あとがき　四八五

写真特集

浄土へのいざない　三
貴族の生活と美術　六四
平等院鳳凰堂　九六
京都御所　一一六
仏画の世界　一四二
法華経の美　一七二
院政のおもかげ　一九六
みちのくの栄華　二三三
武士の登場　二四四
庶民の表情　二七八
絵巻物の世界　三〇〇
敦煌資料と平安文学　三三八
年中行事　三七四
辺境の仏像　三九〇
菩薩来迎　四一八
風流の系譜　四三六
六道輪廻　四六六

装幀　大森忠行

本巻執筆者（五十音順）

犬養　廉　今井源衛　梶原正昭　角川源義　川口久雄
久保田淳　佐藤謙三　竹内理三　長野甞一　三隅治雄
武者小路穣　山中裕

本巻協力者

浅野喜市　大曾根章介　鈴木日出男　竹鼻績　田辺昭三　中村義雄　橋本不美男
二川幸夫　宮次男　宮本瑞夫　森本元子

学燈社　九州大学　京都国立博物館　宮内庁書陵部　国立国会図書館　世界文化社　大映株式会社　中尊寺　東京国立博物館　東京国立文化財研究所　徳川黎明会　奈良国立博物館　日本大学図書館　兵庫県川西市役所　平等院　平凡社　陽明文庫

復古と革新

宇治川にのぞむ平等院

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

欠けゆく望月

望月の歌　この世をばわが世とぞ思ふ望月の欠けたることもなしと思へば

寛仁二年（一〇一八）十月十六日、ちょうど正午から始まった女御藤原威子の中宮となる儀式は、摂政頼通、前太政大臣道長父子の率先指図のもとに、多少の手違いはあったが、まず無事に終了した。

この藤原威子は、道長の第三女である。これより先、道長の長女彰子は、すでに長徳二年（九九六）、一条天皇の中宮となり、次女の妍子も長保四年（一〇〇二）、三条天皇の中宮に立てられ、いずれもまだ健在であった。とくに一条天皇の中宮彰子は、後一条・後朱雀天皇を生んだ国母として、宮廷内ではとくに重きをなし、妹威子がこの日中宮となることについても、特別な配慮を示した。

中宮というのは、奈良時代では、天皇の生母、すなわち皇太夫人のことをいっていたが、平安時代の中ごろから皇后のことを中宮とよぶようになった。だから中宮は皇后の別称であって、皇后のほかに中宮があったわけではなかった。ところが、一条天皇のとき、清少納言の仕えていた皇后藤原定子がいるのに、道長は、おのれの娘彰子を入内させて、定子と同格の地位を得させるために、これを中宮と称することとした。以来、一人の天皇に正妻が二人並び存するという、今日の常識からみれば、まことに奇妙なこととなったのである。

この寛仁二年十月十六日、道長は三女威子を後一条天皇の中宮とすることによって、三人の娘を三代の皇

毘沙門天像
（京都府・浄瑠璃寺）

古都のおもかげ　平安の昔，京都御所のあるあたり一帯は，代々藤原家の伝領であったという。広壮華麗をきわめた道長邸をしのぶよすがもないが，近世に整備されたという御所の建物や，そこから望む東山の連峰には，平安朝のおもかげをとどめている。

后としたわけである。しかも三人とも健在、時は月のなかばである。この日の天候を記録したものはないが、それはおそらく儀式をさまたげるようなものではなかったのだろう。「望月の歌」は、式も無事にすんで、慶賀のため道長邸に集まった公卿の宴席で、のぼりくる満月を仰いで思わず彼の胸底にうかんだ即興の一首であった。座にいた大納言実資は返し歌を求められたが、この歌を披露されては二の句がつげず、「これほどの名歌に返し歌はいりません。一同で今の歌をくりかえし唱和して味わったほうがよろしい」とこたえ、並みいる公卿たちも、これに賛成、一同でこの歌を幾たびとなく唱和した。

道長は、前年に太政大臣従一位となって位人臣をきわめているし、それよりももっとたいせつな摂政の職は、自分の長子頼通がひきついで、万事父親である道長の意見に従ってやっていた。貴族たちもみな、道長のきげんをそこねまいと一所懸命のありさまが目にみえている。一ばん気がかりであった次期天皇を予定される東宮も、前年に、敦明親王（母は皇后藤原娍子、斉時の女）から道長の外孫敦良親王（後朱雀）にきりかえてある。次代も自分が外戚となることは間違いない。

京都の東山の中天さしてさしのぼる満月は、そのまま道長一家を象徴しているのだ。それをとらえて、その心境を素直にうたいあげた道長は、心にくい歌人でもあった。時に彼は五十三歳であった。ここで、しばらく時代の動きに目を向けてみよう。

欠けそめる月

天上の満月は、必ず欠けゆく。道長は、はたしてそのことを心においてこの歌をよんだのであろうか。これから二年半ののち、彼はさらに、威子の妹嬉子を東宮敦良親王の妃におくりこんで、四代目の外祖父たることをねらった。

だが、道長のこうした布石にもかかわらず、満てる月は欠けゆく運命を免れることはできなかった。

あとにして思えば、そのきざしは早くも見えていた。威子が中宮になった年の夏ごろから、道長はときどき病床にふし、健康が不安となりはじめていた。その初めは胸病であった。四月におこった胸病の発作は、発熱と猛烈な胸痛とをともない、さすがの道長もその苦しさに、心神不覚におちいり、苦悩に耐えかねて大声でわめくほどであった。病気は政敵であった兄道兼の霊のしわざとも、眼病を理由に退位をせまった三条天皇の祟りだともいわれた。道長は、法性寺の五大堂に二週間参籠して祈ったが、身体の衰弱ははげしかった。六月には、彼の娘寛子に夫敦明親王（小一条院）を奪われて悶死した親王の妃藤原延子の呪詛によって、貴布禰明神の祟りをうけ、発作をおこした。十月ごろから視力が衰えはじめたので、陰陽道の祓や、仏眼法を修したが効果はなかった。

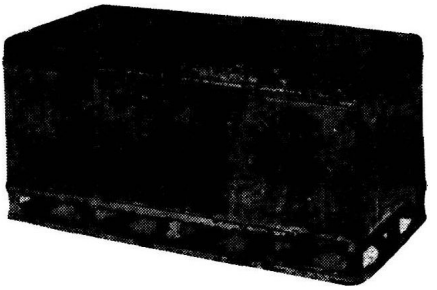
こえて寛仁三年（一〇一九）、重ねて胸病のはげしい発作におそわれた。ついに彼はここで出家を決意し、三月二十一日、延暦寺の僧院源を戒師として出家をとげた。病苦にさいなまれた彼は、やせ衰えて老僧のごとき容貌となっていた。彼は、もはやこの世に長からざるを思い、一大寺院の建立を発願し、七月十六日に着工、数年かけてこれを完成した。すなわち法成寺である。『栄花物語』は、この寺の造営や諸堂の華麗さを最大限の美辞で事こまかにしるし、道長の権勢とその栄華を象徴的に伝えた。だがそれは、道長の栄華が、来世にまで続くことを約束するものではなかった。

法成寺が完成してこの世に極楽が実現したかと思われたにもかかわらず、万寿二年（一〇二五）、諸国は旱魃に苦しみ、そのうえ赤斑瘡（痘瘡）が流行したその最中に、道長の娘の一人、小一条院の女御寛子がこの世を去った。

子福長者であった道長は、これまで一人の子女にも先だたれたことはなかった。ここにはじめてその悲し

みを味わうこととなったのである。しかもひきつづいて、東宮敦良親王の妃嬉子が、臨月に赤斑瘡にかかり、八月三日にかろうじて皇子を出産したが、そのまま危篤となって、二日後にはこの世を去った。妙齢十九歳であった。中宮威子も、外孫後一条天皇も、あいついで赤斑瘡にかかり、さらに、小一条院妃延子やその父顕光の怨霊に悩まされ、道長一家は悲嘆と恐怖に明けくれた。

一年おいて万寿四年（一〇二七）には、娘の皇太后妍子が原因不明の病にかかり、かずかずの修法にもかかわらず、九月三日、これまた父に先だって世を去った。道長は、「自分もいっしょにつれて行け」と号泣したという。道長自身も病気がちであったが、妍子死去の打撃はいちだんと彼の心身を消耗させた。痢病（下痢）と背中の腫物の毒素のため、衰弱を重ねて意識不明となり、この年十二月四日、ついにこの世を去っていった。時に六十二歳であった。



金銀鍍金の経箱　奈良県金峰山の経塚から出土した経箱。法華経などを書写した経巻をいれて埋納したものである。埋経（まいきょう）は，末法思想にともなうこの時代の流行であったが，同じ金峰山の経塚からは，道長が寛弘4年（1007）8月に埋納した経筒が出土している。

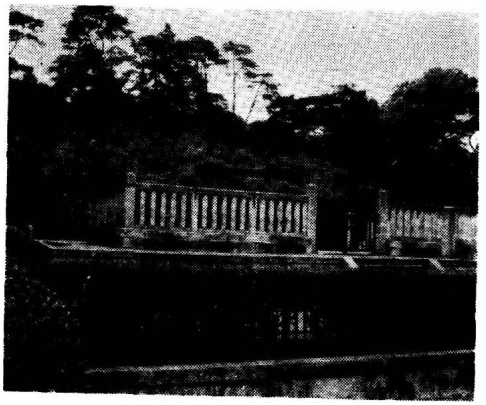
頼通一家の違算

道長がこの世から姿を消したあとの摂関家は、大黒柱を失ったようなものであった。もちろん、道長の在世中にも、すでに頂点にのぼりつめた者の、避けがたい運命の予兆は、いくつかあらわれていた。といって、表面的には目だった変化がおこったわけではない。

嫡男頼通は、父の生存中に摂政をついで、道長出家の年には、後一条天皇の関白となっており、次男頼宗、三男能信、四男教通、いずれもすでに権中納言・権大納言となっていて、太政官議政の席は、二十六議席中二十二議席まで藤原氏が占めていた。東宮敦良親王（後朱雀）の妃となった道長の第六女嬉子は、出産の際の病気で死んだが、生みおとした皇子（親仁親王、のち

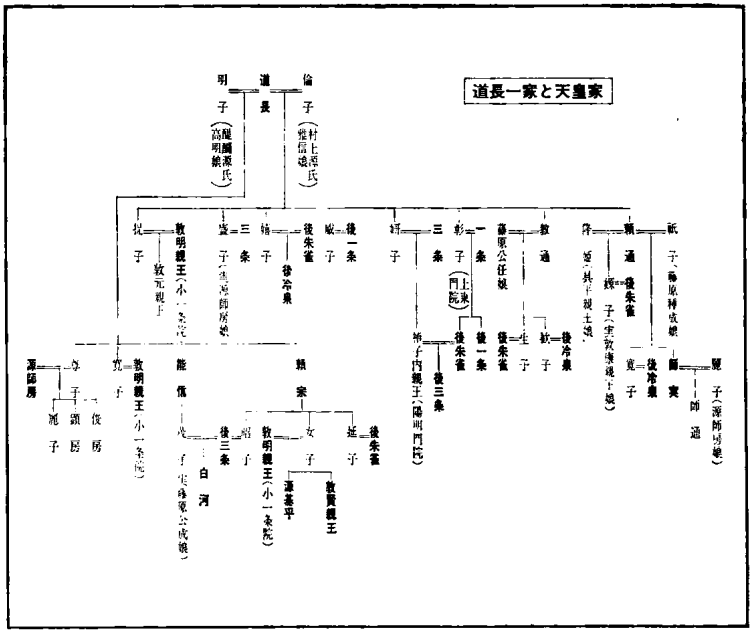
の後冷泉）は無事に成長しつつある。道長の死とともに、道長・家を悩ましていた小一条院女御延子の霊も立ち去ったらしい。頼通は摂関家の威容をそのままもちつづけるには、父道長のしいておいた路線をそのままたどればよろしい。

頼通は、摂関家の権勢も、父道長の栄華も、その根本は、天皇の外戚となるという血縁的関係にあることを、十分承知していた。このことはすでに百年に近い年月のあいだの、国制上の慣行として、動かすことのできないものとなっていた。



後一条天皇陵　後一条天皇は，28歳の若さでこの世を去った。道長の娘彰子を母とし，わずか9歳で皇位についたが，同じ道長の娘，叔母にあたる威子を中宮に迎えなければならなかった。その短い生涯は，すべて道長・頼通の栄華の犠牲であったといってもよい。京都市菩提樹院陵。

だが頼通は、父のように子福長者ではなかった。とくに女子に恵まれなかった。長元九年（一〇三六）四月、後一条天皇が没し、東宮敦良親王が即位して後朱雀天皇となった。東宮には、嬉子が生みのこした親仁親王がたてられた。後一条も後朱雀も、いずれも上東門院彰子、すなわち頼通の同母姉の生んだ皇子である。彰子はまだ健在であり、その限りでは頼通の地位に変わりはなく、前代と同様、関白職にあった。ただ、後朱雀天皇即位のときには、亡き嬉子が生存ならば、当然立后のよろこびを摂関家は迎えることができたであろう。しかし嬉子はすでになく、関白頼通には当年生まれたばかりの娘（寛子）があるばかりであった。頼通は、この時すでに四十六歳であった。当然、数人の子女があってしかるべき年齢にもかかわらず、これまでに一人の女子ももたなかったことは、まことに彼の不運であった。やむをえず彼は、妻（村上天皇皇子具平親王の王女隆姫）の妹が敦康親王とのあいだに生んだ嫄子を養女として後宮に入れ、やがて中宮に立てて、皇子の出生をねらった。しかしながら、頼通の期待を一身



に集めた嫄子の生んだのは皇女であった。嫄子は、皇子誕生の夢もむなしく、入内の三年後には、二十四歳の若さでこの世を去った。

一方、頼通の弟教通も、長女の生子を入内させて女御としたが、これにも皇子はなく、頼宗の娘延子も入内したが、やはり皇子には恵まれなかった。ところが、当の後朱雀天皇はその東宮時代、嬉子が親仁親王の出産で世を去ったのち、道長の肝いりで、三条天皇の皇女禎子内親王（母は道長の女妍子）を東宮妃とした。禎子内親王はやがて、尊仁親王を生み、当然のことながら、後朱雀天皇の即位によって皇后となっていた。もちろん、当帝の東宮には親仁親王が立っているが、頼通にとって、父道長のように二代、三代の天皇の外戚となるには、さらに多くの外孫をもうける必要がある。とくに親仁親王が幼少で位につくばあいの次期東宮を確保するためには、後朱雀天皇皇子の外孫を準備しておくことが絶対に必要である。

頼通一家の焦慮はじつにこの点にあった。後朱雀天皇即位の当初、頼通が、四年にわたって皇后禎子内親王の参内をおさえて天皇に近づけなかったのも、天皇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com